

2020年度 神戸市外国語大学 推薦入学試験問題【小論文】中国学科

次の文章は、毛沢東、周恩来、劉少奇など、中国要人の日本語通訳を務め、その後、新華社通信の首席記者として十五年日本に滞在した劉徳有氏のエッセイである。このエッセイを読んで、問いに答えなさい。

その昔、広島を訪れ、原爆慰霊碑に献花して犠牲者に哀悼を捧げたときのことだが、その碑文に書かれた一文には首をひねった。それにはこう書かれていたからだ。

「安らかに眠って下さい 過ちは繰返させぬから」

この文章には主語がない。

もちろん、「安らかに眠って下さい」が原爆の犠牲になった広島の人たちへの呼びかけであることはわかる。問題は、後段の「過ちは繰返させぬから」である。これでは、誰が過ちを犯したと言っているのだろうか？

広島に原爆を落としたアメリカに対して言っているのか、中国大陸に侵略し、第二次大戦の火蓋を切った日本自身に対してなのか、それとも日米双方なのか。あるいは人類全体を指して二度と戦争はしないと述べているのか、よくわからない。裏を返せばどうとでも取れてしまう言い回しになっているのだ。

実はこの疑問にはっきりとした答えを出した中国人がいた。

政治家・文学者として日中の架け橋となる活躍をした郭沫若氏である。1955年12月、広島を訪問した郭沫若氏は、この碑文を見て、日本の記者団に『安らかに眠ってください。過ちは繰返させませぬから』のほうが適切ではないかと思えます」と指摘したのだ。なるほど、「繰返さない」を「繰り返させない」とすれば、誰が過ちを犯したかははっきりしてくる。

しかし、郭氏の話に同行した日本人記者団は、いまひとつ腑に落ちぬ表情であった。郭氏もそれに気づいたのだろう。原爆資料館を見学した際、郭氏は館内に陳列してあったトルーマン大統領の写真をみて、再度、こう言ったのである。

「さっきの主語なしの碑文は、トルーマンにサインをしてもらえば最適なのではないでしょうか」

(劉徳有『日本語と中国語』、pp.48-50、講談社)

*文中の傍点、下線は出題者が付した。

問1 下線部について、日本人記者団はなぜ腑に落ちない表情だったのだろうか。あなたの考えを述べなさい。(200字以内)

問2 劉徳有氏は、日本語の「腹芸」とか「以心伝心」、「わざとあいまいに発言して、どうにでも取れるようにする」手法について、「国際社会では通じないばかりか、明らかにマイナスになる」と述べている。このようなコミュニケーションの利点と欠点について、あなたの体験や現実の事例を挙げながら論じなさい。(800字以内)